

歌劇における「フロット」について



2024/01/25

最高の喜劇オペラ

いま、NHKの木曜講座で、ロッシーニの《セヴィーリアの理髪師》を観ています。なんとも面白く、上出来の喜劇オペラです。さすがロッシーニで、どのアリアも、どの重唱も、どのオーケストラ曲も、美しいメロディで飾られ、生き生きと躍動的で、表現力が抜群で、まったく飽きさせません。素晴らしいです。

それに、物語の「結構」（けっこう:組み立て）がまた素晴らしい。例えば、最終幕で、アルマヴィーバ伯爵がロジーナと駆け落ちをするために、フィガロと出かけます。ロジーナとは示し合わせてあります。バルトロさんに見つからないように梯子を使って2階から忍び込むことにしました。二階のベランダの鍵もすでに用意してあります。用意万端、万事上手く手はずが整いました。これで充分、見事にアルマヴィーバ伯爵とロジーナの駆け落ちは成功 — とはいきませんでした。

なぜ、でしょうか？ これは、「劇＝ドラマ」だからです。「劇」には筋書きがありますが、筋書き通りに物事が進んでは「劇」にはなりません。途中で、必ず、「邪魔」が入ります。二つも三つも、問題が生じます。その色々な問題を解決するために、筋

書きを書き直さなければなりません。この「書き直した筋書き」のことを「プロット」と言うことにします。このプロットがあって初めて、ハッピー・エンディングとなるのです。この邪魔が難しければ難しいほど、紆余曲折があればあるほど、「劇」はお芝居として成功するのです。ここが、戯曲家の腕の見せ所です。

さて、まんまと、梯子を掛けて2階から忍び込んだのはいいのですが、逃げだそうとすると、ロジーナが、「私は行きません」と駄々をこねます。さあ、大変です！これが「問題1」です。

アルマヴィーヴァ伯爵がリンドーロという貧乏学生に姿を変えていたのが、原因です。ロジーナは、「リンドーロがロジーナをだまして、アルマヴィーヴァ伯爵に渡そうとしている」とバルトロさんから聞いていたのです。それで、フィガロが、「いや、リンドーロとアルマヴィーヴァ伯爵は同じ人なんだよ。わざと身分を隠していたのだよ」と説得して、この「問題1」は解決しました。

次に、2階から逃げ出すために掛けておいた梯子が、もどって見たらありません。バルトロさんが、ロジーナから駆け落ちすることを知って外しておいたのです。さあ、大変です！これでは、三人は逃げ出せません。これが、「問題2」です。仕方なく、1階に降りて、正面玄関から逃げ出すよりしかたがありません。

しかし、だれかが玄関の前で入るのを待っているようです。それも、二人もいます。これが、何者かは分かりません。バルトロさんの味方であれば、捕まってしまう。さあ、大変です！これが、「問題3」です。様子を見ると音楽教師のバジーリオと結婚届けを作る公証人であることがわかりました。これなら、お金で解決できます。アルマヴィーヴァ伯爵は、直ぐにお金をわたして、ついでにロジーナとの結婚証書も作ってしまいます。これで、めでたく二人は結婚出来ました。

このように、逆境を逆手にとってハッピー・エンディングにするのが、プロットの真髄です。

【2024/01/21 都築正道】

